

能楽の地謡学習に平均律教育の蓄積がもたらす影響

— 『土蜘蛛』 演習を通して —

村木洋子¹⁾ 佐久間二郎¹⁾ 白日歩¹⁾

キーワード：平均律、能楽、土蜘蛛

要 旨

平成20年度の学習指導要領改訂では、小学校教育で日本の伝統音楽を正しく理解し尊重する学習姿勢がより重視されるようになった。教育現場での指導においてその難しさが問題となっており、教員の技術向上が課題とされている。邦楽を実践し技術や知識を高めることの難しさはどこから生じるのか、幼稚園及び小学校教員養成課程の履修科目「音文化演習」を通してその一因を探り今後の展望を見出したい。小論では、能『土蜘蛛』の実践演習を分析し、そこから本学の学生が邦楽を学ぶ際の課題について考察する。

1. はじめに

本学人間形成学科では、保育士資格と幼稚園教諭・小学校教員課程の学びを深めている。その一環として「音文化演習」²⁾において、観世流能楽師佐久間二郎講師による能楽の授業を行なっている。これは、平成20年度に改訂された学習指導要領により、小学校の音楽科では我が国の伝統文化をより尊重することとなり、教員養成課程での音楽科教育でも邦楽を取り入れる必要が生じたため、伝統文化のひとつである能楽の演習を実践しているものである。

佐久間講師は、プロフェッショナルとしての公演に加えて能の普及活動に取り組み、全国各地で学生のためのワークショップ等を開催している。これには能楽を取り巻く環境の変化による危機感が影響してい

る。

一昔前は、小学生に「能を見たことがあるか」と質問すると「ないけれど知っている」と答える子どもが多かったのに比べ、今では能そのものを知らないと答える子どもが増えている。以前は祖父母世代が能について何かしらの知識や経験があり、孫に伝えるチャンスがあったものの、世代交代により身近に能を知る存在を喪失したことが要因だと考えられる。むろん、本学で学ぶ学生の多くも後者に属し、能に触れた経験はほとんどなく、他の邦楽分野でも同様と言える。

音楽科教育はクラシック音楽(西洋音楽)を中心として長年行われてきたため、邦楽を取り入れることに混乱が生じることは否めない。教育現場の教員の知識及び経験の

(所 属)

1) 山梨県立大学

不足に加え、養成課程でも同様に感じる。日本古来の固有の音楽を子どもたちに伝えるために、知識のみならず実践による演習を積むことは学生にとって大きな意義があると考えられる。またプロフェッショナルの実演に触れ、その指導を受けることは彼等にとって得難い経験となっている。

2. 研究目的

本学で行われる能楽の授業において、学生が挑戦する能の実践にはかなり高いハードルがある。能楽の技術は長年の研鑽によって培われるものであり、半期の授業による体得はもとより不可能である。小論では、彼等の不得手がより特徴として現れる部分を探り出し、その要因を探ることで邦楽を学ぶ際の留意点を見出したい。

3. 研究方法

2018年度後期に人間形成学科3年生33名

2018年度「音文化演習」授業スケジュール

回	年月日	内容
1	2018年10月26日(金)	能楽の歴史、音楽の特徴について
2	2018年11月16日(金)	能楽の謡・小鼓の演奏方法を稽古する
3	2018年11月30日(金)	能楽「土蜘蛛」謡・小鼓・仕舞を学ぶ
4	2018年12月21日(金)	能楽「土蜘蛛」謡・小鼓・仕舞を稽古する
5	2019年1月25日(金)	能楽「土蜘蛛」グループ発表の練習
6	2019年2月1日(金)	能楽「土蜘蛛」グループ発表する

地謡は、佐久間講師の地謡実演を模倣する形式で全員が稽古をし、(1回につき約3時間)、同様に小鼓・仕舞も全員が稽古をしたうえで、各役職に分かれてグループ発表に備えた。1回につき約3時間の稽古を4回ほど実施した。学生によっては、授業以外の時間にも自主的に稽古を積んでいる様子が見られ、どの学生にとっても、大変新鮮な体験のように見受けられた。

を対象に行われた能楽『土蜘蛛』の実践演習を観察した。6回の授業の最終回2019年2月1日に、3つのグループが実演した能楽『土蜘蛛』を動画撮影で記録して、地謡の部分を実線譜上に採譜³⁾した。学生の実演にどのような特徴が見られ、佐久間講師によるお手本との間にどのような違いがあるかを分析した。

4. 研究結果と考察

1) 能楽『土蜘蛛』演習の授業の流れ

学生は2018年10月26日の1回目の授業で『土蜘蛛』の概要について学び、2回目より佐久間講師の実演を手本にそれぞれの役職を練習した。グループごとに仕舞(土蜘蛛、源頼光)、小鼓、地謡の担当に分かれ、最終的にグループで上演する。今回はその中の地謡を取り上げ、観察対象とした。

動画撮影で記録した発表方法は、あらかじめ練習時間を確保した後のグループ発表とした。飯田キャンパスB館講堂にて、受講学生と教職員4名を観客とする発表であった。

2) 実技に入る前の学生の学び

i) 能の誕生から現在までの歴史の概要⁴⁾

6世紀ころに中国から伝来した「散楽」

をルーツとし、庶民の間に広まり「猿楽」となる。そして、鎌倉時代には「田楽（田遊びから発生した日本の農耕芸能）」「延年（法会などの後、宴で行った寺院芸能）」を経て、室町時代にいよいよ観阿弥・世阿弥の親子が登場する。さまざまな芸能が混ざり合ったものの集大成として、謡・舞・ストーリー性が加わった「能」が完成される。その後、足利義満の庇護を受け、王朝文芸と混ざり合い、高度な舞台芸能へと発展してゆく。その洗練されたものが江戸時代には固定して、幕府公認の式楽となり、シテ方の流儀も定められる。明治維新・世界大戦など苦難の歴史を経て、現在に至る。

ii) 「土蜘蛛」のあらすじ⁴⁾

ある日、源頼光は、原因不明の病にかかっていた。すると、そこへ「胡蝶」という美しい侍女がやってくる。医者からももらった薬を持って頼光を見舞い、励まし、昼夜

を問わず頼光の身の世話をする。ある夜、苦しむ頼光の枕もとに、身長が2メートル以上もある大きな僧が現れ、ジッと頼光を見つめている。怪しい様子に頼光が警戒すると、突然、その僧は頼光めがけてクモの巣をなげつけてきた。そこで頼光は、「膝丸」という名刀を抜き、謎の僧を斬りつけると、敵は闇の中へと消え失せる。夜中に騒動を聞き付け、頼光の側近である「独武者」がすかさず駆け付ける。そこで、頼光は、最前の出来事を語って見せる。それを聞いた独武者が屋敷内を見ると、先ほど、頼光に斬られた血のあとが点々とある。その血のあとを追い、家来はいよいよ敵の住む山をめざしていく。さて、血のあとを追ううちに、都北の山奥深くにやってきた一行。やがて、そこで怪しき塚を見つけた独武者は、早速に塚を崩しにかかる、中から恐ろしい姿をした「土蜘蛛」の妖怪があ

授業風景2018年11月16日



られる。それを聞いた武者は、いよいよ土蜘蛛を退治しようとするが、なかなか手強い妖怪。次々に蜘蛛の糸を吐き出して、散々に武者たちを苦しめる。長い死闘が繰り広げられる中、次第に妖怪も力をなくして来る。そこで、武者たちは最後の力を振り絞り、ついに土蜘蛛を打ち倒すと、敵の首を掲げ意気揚々と都へ帰っていく。

iii) 能の役職についての理解

学生ははじめに「すり足」から始まる所作を体験した。その後、謡と小鼓の実技指導も加わり、能の役職の一部を以下のとおり発表会に向けて授業で学び理解した。

シテ方は能の中で中心的な存在で主役である。その他に、準主役であるツレ、コーラスの役割を果たす地謡もシテ方がつとめる。ワキ方はワキ役を務め、シテの相手方として欠かせない存在であり、観客の立場として能の進行を、演技を通して見つめる。そして囃子方は、笛・小鼓・大鼓・太鼓と

いう、謡の拍子(リズム)をとったり、舞の時の伴奏を担当する。他に狂言方も加えて4つの役職について理解した。

3) 学生の「謡」音程の分析(佐久間講師の「謡」との比較)

まず、佐久間講師の地謡を五線譜に採譜した楽譜を提示する。但し、この作業は非常に困難で、無理矢理平均律⁵⁾に当てはめた感が否めない。平均律における最も狭い音程である半音よりも更に狭い音程によって表現されているので、出来上がった五線上の楽譜をその通りに歌ってみても、講師の実演とは程遠い陳腐な印象しか与えない。テンポにおいても、常に揺れる細かな機微を西洋音楽式のリズムに当てはめるのは不可能である。音程、テンポともに不正確な楽譜が出来上がったと言わざるを得ない。

譜例①佐久間講師(採譜楽譜)

土蜘蛛

佐久間二郎先生

けしょうと みるよりも けしょうとみるよりも まくらにありしひざるを

ぬきひらき— ちょうときれば そむくるところを つづけさまに

あしもためず なぎふせつつ えた—りや おうとののしるこえに

かたちはきえて うせにけ—り かたち— は(あ)きえてうせ— にけ—り

佐久間講師の謡と学生の謡を視覚的かつ客観的に比較できる方法として、採譜を試みたが、改めて謡を平均律で表現することに限界を感じた。特徴としてはport.⁶⁾によって表している『謡いぐせ』⁷⁾が随所に出てくる。

私達が今現在、クラシック音楽として享受している作品の多くは平均律で作曲されている。ドから次のド（1オクターヴ）までは12音に均等に分割されていて、隣同士

の音（半音）の距離は全て等分である。クラシック音楽のみならず、子どもの頃から何気なく耳にしているテレビやラジオの音楽も、学校で習って歌う楽曲も、ほとんどが平均律で作曲されている。誰もが認識しているいわゆる「ドレミ」の範疇に佐久間講師の謡を持ち込むことは出来ないのである。

一方、学生グループの謡には興味深い特徴が伺える。

譜例②学生第1グループ（採譜楽譜）

土蜘蛛

1グループ

けしょうとみるよりも けしょうとみるよりも まくらにありしひざまるを
ぬきひらき ちょうときれば そむくるところを つづけさまに
あしもためずなごふせつつ えたーりやおうとののしるこえに
かたちはきえて うせにけーり かたちーはーきえて うーせにけり

まず、学生達の演奏はどのグループもテンポが速い。佐久間講師のテンポと比べると歴然である。そもそも冒頭から既に速く、その後更に速くなり1グループでは後半♩=210ca.までテンポアップしている。また、冒頭の上行音程が佐久間講師の手本は半音であるのに対し、学生グループでは完全4度あるいは完全5度跳躍していて、大

きな違いが生じている。そして何よりも、音程が3グループ共に似通っていて、平均律にほぼ当てはまる。

テンポの問題も興味深い（その考察は次の課題として）今回は音程に着目したい。3グループ共に採譜は容易な作業であった。というのも、彼らの地謡がドレミの音階、つまり平均律の旋律に聞こえたからで

譜例③学生第2グループ (採譜楽譜)

土蜘蛛

2グループ

Musical score for '土蜘蛛' (2 groups). The score consists of four staves of music in treble clef with a key signature of one flat. The tempo markings are: 136ca., 138ca., 164ca., 172ca., 192ca., 200ca., *riten.*, 150ca., 136ca. The lyrics are: けしょうとみるよりも けしょうとみるよりも まくらにありしひぎまるを
ぬきひらき ちょうときれば そむくるところを つづけさまに
あしもためずなぎふせつつ えたりやおうとののしるこえに
かたちはきえて うせにけーり かたちーはー きえて うーせにけり

譜例④学生第3グループ (採譜楽譜)

土蜘蛛

3グループ

Musical score for '土蜘蛛' (3 groups). The score consists of four staves of music in treble clef with a key signature of one flat. The tempo markings are: 132ca., 140ca., 164ca., 172ca., 192ca., 200ca., *riten.*, 160ca., 136ca. The lyrics are: けしょうとみるよりも けしょうとみるよりも まくらにありしひぎまるを
ぬきひらき ちょうときれば そむくるところを つづけさまに
あしもためずなぎふせつつ えたりやおうとののしるこえに
かたちはきえて うせにけーり かたちーはー きえて うーせにけり

ある。もちろん、それは100%ではなく微妙な音程の揺れが聞こえるが、ほぼ平均律に当てはまった。佐久間講師のバージョンと同様に出来上がった楽譜を歌ってみると、学生達の実演とほぼ同じような地謡を再現することが出来た。まるで最初からト音記号で記譜された楽譜があり、それを歌っていると少しずれてしまったかのような印象であった。

何十年と厳しい研鑽によって培われるプロフェッショナルの技を、未経験者が模倣することには当然無理がある。従って佐久間講師の実演と同じものを学生が奏することは難しい。しかし、そのことと平均律に近い旋律を彼らが奏したことは別の問題であり、興味深い。彼らは授業外でも講師の実演CDを手本として練習を重ねている。本来の能の発声は素人に真似できるものではなくとも、音の動きを模倣することは出来るはずである。

4) 学生への質問紙調査からの分析

学生は練習のためにそれぞれの耳で確かに本物の地謡を何度となく聞いている。それを彼らが模倣し再現する際に、音の動きは頭の中で平均律に書き直され発声に至っているのではないだろうか。彼らは当然のことながらこの作業を無意識のうちに行っている。何故このような現象が生じるのかを探るために、受講した学生33名を対象に下記の質問紙調査を実施した。

【質問内容】

1. 邦楽の授業やレッスンを小学生時代に受けた経験はありますか？
ある場合は具体的にお書き下さい。
2. 邦楽の授業やレッスンを中学生時代に受けた経験はありますか？

ある場合は具体的にお書き下さい。

3. 邦楽の授業やレッスンを高校生時代に受けた経験はありますか？
ある場合は具体的にお書き下さい。
4. 学校の音楽の授業以外に何か音楽のレッスンを受けたり、活動に参加していたことがありますか？ある場合はお書き下さい。
5. 大学の授業以外で、邦楽に接する機会がこれまでありましたか？あれば具体的にお書き下さい。

i) 質問紙調査結果

有効な回答数は24名で、結果は下記の通りであった。

1. ある 2名 なし20名 不明 2名
(理由下記)
2. ある11名 なし13名
3. ある 5名 なし19名
4. ある18名 なし 6名
5. ある 1名 なし22名 不明 1名
(理由下記)

ii) 質問紙調査結果の分析

この質問紙調査は任意の記名において実施した。1. の回答で複数の学生が「合唱」と答えており不可解であったことから、記名により提出したものにインタビューを試みたところ、「邦楽」の意味を“日本語によって書かれた歌”と認識していることが判明した。つまり、学校の授業で日本語の合唱曲を練習した経験を、邦楽の授業を受けた経験と認識していたのである。5. の回答に「ジャニーズのコンサートへ行った」と回答している学生もおり、「邦楽」という言葉の認識が共有されていないことが判明した。質問紙調査結果が不明に分類されているものはこれらの理由による。

1. の結果は小学生時代に邦楽に触れた

経験があるものはほとんどいないことを示している。2. になると経験者の数が増え、そのうちほぼ全てが学校の授業で琴を経験したと回答している。3. においては経験者の数は再び減少し、あると答えた学生の内訳は三味線、琴、尺八であった。4. は複数回答にわたったが、記入された具体的経験は全てクラシック音楽系統であり、ピアノのレッスンを受けていたものが12名、吹奏楽部に所属したものが10名、合唱クラブに所属したものが4名、弦楽部に所属したものの、バイオリンのレッスンを受けていたもの、バンド活動に従事したものがそれぞれ1名であった。5. の回答からは邦楽に触れた経験を持つ学生はほとんどいないことが分かる。

iii) 質問紙調査結果から読み取れること

質問紙調査全体を通して、対象学生の邦楽における経験値は、小学生時代から現在に至るまで低いと言うことが出来る。唯一目立つのは中学生時代におけるお琴の経験のみで、西洋音楽の経験値の高さに比べればその差異は歴然としている。また「邦楽」という言葉に伝統音楽を想起しないものさえいることが、質問紙調査の結果を物語っている。結果的に質問の設定にミスを認めるものの、この言葉の認識の違いには大きな驚きを覚えた。商業音楽分野におけるヒットチャート等で、日本人アーティストによる楽曲を邦楽、外国人アーティストによる楽曲を洋楽と称していることが影響しているであろう。

学生達の受けた音楽教育歴を紐解くと、邦楽を学ぶ機会は稀少であり西洋音楽を学ぶ機会に恵まれていたことが伺える。彼らが小学生だった頃、ようやく学校教育でも伝統音楽に触れることに重点が置かれ始め

た頃だった為、多少は学校の授業で触れる機会があった学生もいるが、学ぶというところまでは達していないと言えよう。彼らは大学入学以降も、ピアノ実技など音楽科関連の授業を複数履修しており、これらはいずれもクラシック音楽を基盤とする学習である。多くの音楽経験を子ども時代から平均律を通して培ってきたことは明らかで、この傾向は日本の教職を目指す学生全般に言えることになる。

人間が言葉を習得する過程は子どもの音楽学習を理解する上で参考になる。人は乳児期から外部の人間が発する言語を聞くことでその発音を習得し、発声を可能にしていく。今井(2013)⁸⁾は『日本人の大人は英語の“lace”と“race”、“she”と“see”の聞き分けがなかなかできませんが、生後10か月くらいまでの赤ちゃんは問題なく聞き分けられます。しかし一歳の誕生日くらいまでに自分の母語での音素のカテゴリー分けを学習すると、それ以降は自分の言語で同じ音素のカテゴリーに入る音の物理的な違いには注意を向けなくなり、前にはできていた音の区別ができなくなってしまう。』と説く。

乳幼児は周囲の大人が話す言語を聞くことでその会話力を養うため、母国語にない外国語の発音を成長後に発声することは非常に困難である。日本人が英語を苦手とする理由の一つはここにある。RとLの発音に苦労する話は有名であるが、それは日本語にその区別の必要がないため、聞き分ける経験を積んでいないからである。そして、自分たちの獲得した発音の中で最も近い音を選んだ結果、RもLもラ行で発音することになる。

同じことが音程においても起きていることを今回の事例は示唆している。ミの隣は

ファであり、シの次はドである音楽を経験してきた学生に、その間にある音程を聞き取り表現することは容易ではない。母国語で書かれた地謡のセリフは発音出来ても、音の抑揚は模倣出来ない。それは彼らの脳は地謡を無意識のうちに平均律による旋律へと書き換えてしまい、本来の作品とは似て非なるものに仕上げているからであろう。

5. まとめと今後の課題

平均律の音楽によって育まれてきた日本の学生にとって、本末転倒ではあるが、邦楽を学ぶことはまるで異文化体験になっている。和服を着ることが多くの日本人にとって非日常的行為になっているように、かつて当たり前で享受していた音楽は新たに学び直す必要がある。そして基盤となる音

楽経験がない限り、それは難しい作業であることを今回の考察は示している。

このジレンマを解決する方法は、まずは幼少期から邦楽作品に触れることが有効であると考えられる。新課程では小学校で正式に「英語科」が加わり、将来英会話における日本人の不得手な発音を克服することが期待されている。同様に、成長過程において邦楽に積極的に接することによって、その鑑賞や理解の基盤を築いていくことが、我々の固有の文化を継承する有効な手段になり得るであろう。また、その経験に預かることのなかった学生へのアプローチ方法は、今後さらに継続して課題としつつ、同じ音楽教科においてもあらゆる点で異なる西洋音楽と邦楽の在り様を混同することがないように、必要な気づきを丁寧に与えていきたい。

能楽『土蜘蛛』演習で使用した謡テキスト

土蜘蛛

シテ「悪かの仰せ候や。悩み給ふもわが背子が。来べき宵なり。ささがにの見「蜘蛛の振る舞いかねてより。知らぬと言ふになお近づく。姿は蜘蛛の如くなるが。シテ「懸くるや千筋の一筋に見「五体をつづめる。シテ「身を苦しむる。」

「化生と見るよりも。化生と見るよりも。枕にありし膝丸を。抜き聞きたうと斬れば。背くるところを続けさまに。足もためず難ぎ伏せつつ。得たりやおうと罵る声に。形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。」

引用・参考文献、註)

- 2) 山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科3年生を対象に後期15回行われる授業で、そのうち6回は能楽師佐久間二郎講師による実践演習である。2018年度で12年目である。
- 3) 曲の旋律や調子を譜面に書きとること
(三省堂ウェブディクショナリー)
- 4) 佐久間二郎『能楽入門講座花のみちしるべ』(2007) プリントパック社p.1-6
- 5) 十二平均律はoct. (オクターヴ) を12の半音に平均等分したもので、何調を演奏しても均質な響を得られるのが利点である。1 oct.を12等分する理論は16・7世紀頃から進められてきたが、J (ヨハン) .S (セバステイアン) .Bach (バッハ) (独1685?1750) が十二平均律を定着させる目的で《平均律クラヴィーア曲集》を作曲したことにより、平均律がすべての調の演奏を可能にすることが立証され、広く音楽の世界に押し出された。菊池有恒『楽典 音楽家を志す人のための 新版』音楽之友社 (1998) p.25-26。
- 6) portamento (ポルタメント) 高さの異なる音へなめらかに移行すること。石術真礼生『楽典 理論と実習』音楽之友社 (1965) p.162
- 7) 「ゆらぎ」や「なびき」等の言葉で表現される。能楽師の各流儀や師家に伝わる謡い方の特徴 (=癖) であり、謡い手の発声の仕方によって様々に変化することで音程が一定に統一されるものではない。
- 8) 今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』株式会社筑摩書房 (2013) p.24-25

Influence of Long Years of Music Education Based on Equal Temperament on the Learning of Jiutai in Nogaku:

— the Case of a Seminar on the Tsuchigumo —

MURAKI Yoko * SAKUMA Jiro * SHIRAKUSA Ayumi *

Abstract

The new education guidelines amended in 2008 puts a greater emphasis on learning to understand correctly and to respect traditional Japanese music in elementary school education. Difficulty in doing so has come to pose a problem to teachers in classrooms, making it incumbent to improve their skills. Whence do difficulties in practicing Japanese music and improving relevant techniques and knowledge arise? The author intends to investigate one of their causes through the course “Acoustic Culture Seminar” offered in the program for training kindergarten and elementary school teachers to obtain future prospects. This paper analyzes a practical seminar on the Noh play Tsuchigumo to consider problems our students have in learning Japanese music.

Key words:

equal temperament, Nogaku, Tsuchigumo